

# 博士学位論文『近世・近代における程度副詞・強意副詞の研究』概要書

市村太郎

## 1 本論文の目的

本論文は、近世から近代の日本語における「たいぶ」「たいそう」などの程度副詞や、「ほんに」「ほんとうに」「まことに」など、後続の文意を強調する機能を持つ副詞（強意副詞）について、その実態を、時代を追って分析・比較し、意味・用法の変化や各語の消長を、前後の時代を視野に入れながら検討することによって、類似する副詞等の表現の変遷や、共時的なあり方、程度副詞・強意副詞全体の動き等を明らかにすることを目指したものである。

副詞の多くは他の品詞に由来するもので、意味の抽象化が進んだものが多く、一見・一考しただけでは意味・機能が説明できないような難しさがある。そのような副詞の中でも、一般的に「属性(質)や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定する」(仁田義雄『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版 2002 年)などと説明される程度副詞は、程度の甚だしいことを表すものに限ってみても、「とても」「非常に」「ずいぶん」「たいそう」「すごく(すごい)」「すこぶる」など、類義語を挙げれば、枚挙に暇が無い。

程度副詞は、一見どれも同じような意味・機能を持っているように見えて、微妙な、いわゆる「ニュアンス」レベルの違いが存在する。意味の共通部分が多いだけに、その細かな特性や意味・機能は、日本語がもつ重要な要素について示唆しているように思われるのである。

現代語の研究において、その複雑な特性の差異を明らかにすることは、日本語学上の大きな課題であるが、その史的状況を見ると、さらに多くの課題が残されている。「あまり」、「よほど」、「だいぶ」、「たいそう」、「ずいぶん」などの近世期の用例には、その意味・機能において、現代語との相違が認められる。「後続の状態の程度が甚だしい」という、それぞれ共通した意味を持つ関連性の高い語でありながら、意味が異なっているとすれば、具体的にどの部分が異なるのであろうか。また、現代の状況に至るまでには、各語がいかなる過程を経、いかなる関係を成してきたのだろうか。

また、上記のような程度副詞の他にも、類似した機能を持つものに、「ほんとうに」「まことに」などの、真実性を表しつつ文意を強調する語類もある。

「ほんとうに」などの語は、「だいぶ」や「すこし」のような、状態の程度を計量的に示す語とは異なり、あくまで事実認定の強調を介して文意の強調を行っていると考えられる。

本論文では、これら文意の強調を担う副詞を、後続する状態性の語の程度の甚だしさを示す程度副詞と区別し、強意副詞と呼ぶことにする。

これらの副詞は、使用頻度の割には、程度副詞に比べて史的研究の面では遅れていた。

これらの語の中にも、「じつに」「まことに」などの類似する語が複数あるが、いったいいかなる関係を成し、いかなる過程を経て現代に至っているのであろうか。

本論文では、程度副詞と強意副詞のうち、特に主要な語・従来研究が遅れていた語を取り上げ、関連語や関連語形を含めて調査を行い、近世から近現代に至るまでの各語の意味・機能の変遷や、各語の他の語との関係などを明らかにすることを旨とする。

なお、程度副詞を分析する際は、渡辺実『国語意味論』（塙書房 2002 年）に示された観点の中でも、比較的判断基準が明瞭で、二者択一的に判断可能な「わがこと」「ひとごと」の別、話者にとっての評価のプラス・マイナス、比較に関わるか否か、という観点を取り入れ、程度副詞全体の中でその語がどのような特徴を持っているのかに配慮する。

特に程度副詞の人称性を表す「わがこと」「ひとごと」という観点は、「(お会いできて)大変うれしい」「非常にうれしい」のように「わがこと」表現で用いることができるものと、「\*ずいぶんうれしい」「\*だいぶうれしい」など「わがこと」表現では用いることができないものの差が明瞭で、またいずれにも主要な程度副詞が含まれることから、程度副詞を分類する指標として重要な要素と言ってよいであろう。このような性質の違いが、歴史的な使用状況にいかに関わっているのかについても検討する。

## 2 近世後期江戸語・上方語における程度副詞・強意副詞の使用状況について

近世から近現代にかけての程度副詞・強意副詞を検討する土台として、第 1 部第 1 章では、近世後期の洒落本を対象として調査を行い、近世後期江戸語・上方語における主要な程度副詞・強意副詞を見出すことを試みた。

その結果、主要な程度副詞では下記の語が挙げられた。

【江戸】：あまり いっそ おおきに ずいぶん だいぶ とんだ よほど

【上方】：あまり いっこう えらい おおきに きつい ずいぶん だいぶ よほど

【共通】：あまり おおきに ずいぶん だいぶ よほど

また、強意副詞では「ほんに」「まことに」といった限られた語が、江戸・上方共通して多用されている状況が明らかになった。

さらに、主な程度副詞について、自らの感情・状態を修飾しうるかという視点で状況を確認すると、下記の通りであった。

【「わがこと」的用例の有無】

- ・「わがこと」的用例の有 : いっそ(江戸)・いっこう(上方)・いこう(上方)・きつう(上方)
- ・「わがこと」的用例の無 : とんだ(江戸)・ずいぶん・だいぶ・よほど・えろう(上方)・  
おおきに(おおいに)

・判断材料不足により未詳：あまり・きつく(江戸)

### 3 近世・近代における程度副詞について

第2部では、第1章での、近世後期洒落本における程度副詞の全体的な状況を踏まえたうえで、近世・近代における主要な程度副詞として「だいぶ」「たいそう」「たいへん」等を取り上げ、語誌的に論じた。また、現代への流れや、共時的状況を確認するため、近代雑誌を対象として調査を行った。

第2章では、「だいぶ」をとりあげ、形態・意味両面の通時的な状況を論じた。

中世や近世前期上方語では、副詞用法とともに名詞的用法が見られたが、近世後期の資料からは確認されなかった。近世後期以降では、「だいぶ」類は中世や近世前期上方語の用例に見られた名詞的性格を失い、副詞として用いられるようになったと考えられる。

意味の面では、近世上方の「だいぶ」類は、金銭等の量や規模が大きいさまを表す用法が多く見られたが、近世後期江戸の資料では、副詞として抽象化し、程度副詞としての用法が多くを占めるようになり、量の面でも金銭等に偏らなくなった。また、近世前期までは単に量・規模や状態の程度の高さを表していると思われる例が多かったが、近世後期江戸語以降、ほぼ現代語と同じように、比較を背景とする相対的な程度や量一般の大きさを表すようになったと考えられる。

第3章でとりあげた「たいそう」は、近世後期江戸の、特に人情本等から程度副詞の例が見られ、以降近代初期にかけて、量・規模の大きさや、その場で気付いた事柄に使用できるなど、他に対する誇張的強調を背景とし、比較的抽象的な程度副詞として広範に用いられた。

しかし、明治期には「たいへん」等におされ、次第に勢力を弱めた。主に「ひとごと」を表す「たいそう」に対して、「たいへん」は自らの感情等「わがこと」をも表し得、また漢語として改まり語としても急速に広まった。一方で「たいそう」はその「ひとごと」的性格や誇張的強調を背景として、昔話など、物語等の地の文との結びつきを強め、国定国語教科書などで多く用いられた。

このような状況が、現代での古典文学の現代語訳や、回想的・伝聞的文脈での使用につながっていると考える。また、他について述べ立てる機能は、ほめや皮肉などでは効果的であり、会話においてはそのような限定された場面で存続している。

第4章では、近代から現代にかけての程度副詞の状況を探るとともに、文体的傾向の有無を明らかにするため、国立国語研究所『太陽コーパス』・『明六雑誌コーパス』内に出現する主な程度副詞について調査した。その結果、文末辞を基準とした文語記事・口語記事の別による文体的な出現傾向に、各語について明らかな違いが見られた。ただ文語的な傾向を示す語については口語記事でも多用されているなど、必ずしも文末辞による口語・文語の別と一致していたわけではない。このことは、文末辞だけでなく程度副詞も、「文語」

「口語」をさらに分類する上での、文体的な指標となりうることを示唆していると考えられる。また、「文語」から「口語」への大きな流れを背景として、文語的な語、あるいは古くからある語が継続して用いられながらも勢いが停滞しつつある傍ら、「ひじょうに」や「たいへん」といった、口語的で汎用性の高い副詞の使用が拡大しつつある様子が見られた。

#### 4 近世・近代における強意副詞について

次に第 3 部では、「ほんに」「ほんとうに」「まことに」「じつに」といった、真実性を表す名詞に由来する、文意強調的な副詞に関して、中世から近代にかけての状況を調査し、それぞれの語の各時代での関係に配慮しつつ論じた。

第 5 章で取り上げた「ほんに」は、中世～近世初頭では、名詞・形容動詞の延長上で述語動詞に前接して連用修飾していたが、近世前期には文意や事柄に対する実感的・発見的強調を表す副詞に転じた用例がみられ、談話標識のような機能を持つに至り、名詞・形容動詞的用法と共に多様な形式で用いられた。

その後も副詞として近世を通じて幅広く用いられたが、近世後期には次第に抽象化・固定化が進み、近代初期に衰退傾向に転じた。その一方で、特に江戸語・東京語においては近世末から近代初期にかけて「ほんに」に代わり「ほんとうに」の使用・用法が拡大し、「ほんに」は衰退した。

その背景には、〔述語用法の喪失→連用修飾と連体修飾との併存→それぞれの固定化・抽象化→一部を残して衰退傾向〕という「ほん」全体での変遷過程があり、単に副詞としてのみの衰退ではなかった。「ほんとう」類はそれに連動し、名詞・形容動詞用法から徐々に、「ほんに」と類似する過程を経て拡大したと考えられる。

第 6 章では、前章の「ほんに」や「ほんとうに」に加え、副詞「まことに」について、近世後期から近代初期の、主に江戸・東京の口語を反映しているとされる資料により意味・用法を分析した。

近世後期の口語資料において、副詞「まことに」の使用状況を確認すると、とくに人情本において多用されていた。この点において類義語「ほんに」とは対照的な分布を示していた。

その意味用法を検討すると、〔事柄の内容・話し手の情意を、真実性を含んで強調する副詞〕であり、事柄内容の内にある場合に程度副詞と似た機能をもつという、現代の「本当に」に近い用法で幅広く用いられていた。

しかし次第に感謝・謝罪・挨拶などとの結びつきを強め、また改まり語化する傾向も見られた。現代においてはこれらについての「情意の伝達」に集約されつつあるとみられる。

第 7 章では、第 5 章、第 6 章に続く時代の状況を確認するため、明治 20 年代までの資料から、「じつに」「まことに」「ほんとうに」の同時代的な関係を分析した。

近代初期資料に見る副詞「じつに」は、とりわけ書生など男性知識層の会話文に多く見

られ、後続する事柄に対する自らの評価や驚きなどを強調的に述べる副詞として盛んに用いられた。一方、女性話者の会話文にはほとんど見られないことから、近代初期の男性知識層の話し言葉を特徴づける語と言ってよいと思われる。

一方「まことに」は、一部武士階層の話者などに硬い語感を表す用法が残存しているが、挨拶表現や感謝・謝罪等と結びついて聞き手に対する丁重さを表すことが多い。

また、この時期「ほんに」に代わり本格的に使用されるようになった「ほんとうに」は、地の文や文語文では用いられず、また改まりの度合いも低い、口語的性質の強い語と言える。幕末以降の「ほんに」同様、女性に多く用いられているが、男性の使用も各作品で見られ、用法も、各語に共通する事態強調的な副詞用法から、事実であることを述べるもの、応答詞に近い用法、さらに「ほんとう」全体では形容動詞としての用法等があり幅広い。3語の中では、偏りが少なく、比較的制限の少ない、汎用性の高い語と言える。

さらに明治期以降の状況を確認するため、国定国語教科書における3語の状況を確認したところ、「男性的」「丁重語」などという偏りの生じた「じつに」や「まことに」に対し、当初はくだけてはいたが、より広く用法を残し、偏りの少ない「ほんとうに」の使用が最終的に拡大し、現代に至った様子が窺えた。

## 5 まとめ

上述の個々の語の意味・用法を通時的に見た時に、その変遷からうかがえるのは、ある語が連用修飾語として抽象化・固定化し、副詞化して「程度の甚だしさ」を表すなど、抽象的な意味を生じた語が、時代を経るにしたがって、何らかの使用環境上の制限を生じ、次第に個別的な特徴を帯びる点である。

例えば「大分」は、副詞として用いられ始めた当初は単純な程度の甚だしさ表していたと考えられるが、その後時代が下るにつれて、「ひとごと」系の「比較を背景とする相対的な程度の甚だしさ」を表すという、一種の制限が生じている。

また、副詞「たいそう」は、当初は量・規模の大きさや、その場で気付いた事柄に使用できるなど、他に対する誇張的強調を背景とし、幅広い使用が見られたが、回想的・伝聞的文脈での使用や、他についてほめや皮肉を含めて述べ立てるといった場面での使用という個別化が進んでいるとみられる。

強意副詞においても、中世以来用いられてきた「まことに」は、改まり語化し、挨拶や謝罪表現を用いる場での使用に傾きつつある。

このような傾向は、比較的新鮮な表現が求められ、新たな類義語が次々生産される程度副詞等の語彙体系の中では、ある意味では当然である。新たな語が盛んに使われるようになれば、元あった語が存在しつづけるためには、新たな語とは異なる何らかの特色を持ち、棲み分ける必要がある。そこに個別化が生じる契機があると思われる。「たいそう」には「たいへん」などの語が現れ、「まことに」には「ほんに」「ほんとうに」が現れた。

ただ、その個別化が生じるとしても、その新たに加わる特徴は、その語の歩んできた道程とは無関係なものではない。「たいそう」の「ほめや皮肉を含めて述べ立てる」という特徴は、形容動詞「たいそうなり(だ)」の持っているものであった。また、同時代的に量や規模の大きさをも表してきた「だいぶ」は、比較という、「程度を量的にはかる」文脈で用いられるようになった。また、「誠実さ」を表す「まこと」を含む「まことに」が、挨拶や謝罪の場面と結びつくようになるというのは、もともとの名詞が持っている意味から言えば、きわめて自然なことである。程度副詞の意味的抽象化に際しても、文法化の過程に見られるような、P.J.Hopper,E.C.Traugott “Grammaticalization” (Cambridge: Cambridge University Press 1993年、P.J.ホッパー・E.C.トラウゴット著・日野資成訳『文法化』九州大学出版会 2003年参照)の述べる「持続性」が見られるのである。

次に、近世から近現代にかけての程度副詞・強意副詞語彙の全体的な流れとしてうかがえることを述べる。

第1章で見た近世後期洒落本における程度副詞で、主要なものとしていくつかの語を挙げたが、その後の状況を見ると、明治・大正期の段階では、「あまり」や「いっそ」「いっこう」は陳述副詞的傾向が進み、「とんだ」は連体詞化し、口語では「きつい」、文語では「いたく」が程度副詞としては東京語では衰退し、代わりに「たいへん」「ひどく」「たいそう」「いちじるしく」などの新しい語の拡大が見られた。

さらに現代語の程度副詞を、工藤浩「程度副詞をめぐる」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院 1983年)に掲載されている内の主要な語について、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 1.1.0)の短単位検索を用いて調査すると、洒落本や近代雑誌での状況に比して、「とても」「かなり」「すごい」「けっこう」「そうとう」などの語が上位になっている様子が見える。この状況は、松井栄一「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさを表す場合—」(松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院 1977年)の昭和21年以降の程度副詞の使用順位(pp.746-747)とも大きく異なる。語彙的には近世以降、現代で用いられ続けているものも多くあるが、その他の語との相対的な使用頻度は大きく変動し、ある語は衰退に向かう一方、程度副詞として新しい語や用法が供給され続けているのである。

この中で、特に注目されるのは、近世から近現代にかけて、洒落本、近代雑誌、現代語と見た時に、「わがこと」系副詞の変動が大きいという点である。

「だいぶ」「ずいぶん」「よほど」など、「ひとごと」系で、比較に関わる副詞は、現代に至るまで、各時代の最上位ではないものの、息長く使用され続けているが、その一方で、近世後期、江戸・上方各地域において高頻度で使用されていた「わがこと」系副詞「いっそ」「いっこう」などは、近代雑誌や松井(1977)の調査ではすでに衰退し、「非常に」「とても」「大変」「ひどく」などの新たな「わがこと」系副詞が盛んに用いられ始め、現代に至っている。

この原因としては、次の2つの可能性が考えられる。

第一に、「わがこと」系程度副詞は自らの感情や感覚を表現する場合に用いられる表現であり、より語の新鮮さが求められ、その結果として、語の新陳代謝が激しいのではないかという点である。

また、第二に、社会情勢の変化との関係が背景にあるのではないかという点である。近世後期においては、江戸の「いっそ」、上方の「いっこう」のように、使用される「わがこと」系副詞には大きな地域差が見られたが、近代に至って標準語の設定が目指されるにあたり、統一的な「わがこと」系副詞が志向され、「非常に」「大変」などがそれにあたるものとして受け入れられた、という可能性が考えられる。

このように、近世から近代にかけての程度副詞は、多種多様な語が用いられ、現代と同様に、渡辺(2002)が指摘した、自らの感情や状況まで修飾しうるかどうかが、話者にとってプラス・マイナスの評価をもつか、比較に関わるのか否か、回想的文脈で用いられるかなど、それぞれが細かな機能の違いを持って存在していた。

また、江戸・上方の地域差や、口語・文語の文体差など、言語の社会的要素の影響が見られた。語によっては社会集団内で独自の機能を持ち、さらにそれぞれの特性が時代を経るにしたがってさまざまに変化し、あるものは衰え、その代わりにある語が加わるといった新陳代謝を経て複雑な類義語関係を為し、現代に至っているのである。

一方、強意副詞の用法に目を向けると、程度副詞的に状態性の語を修飾することもあれば、より文頭に近い位置で、後続の文意全体を肯定的に強めることもあり、構文的に幅広い位置で、文意・語意を強調する表現であった。また、これらの語は「わがこと」的な事態に頻繁に用いられ、話者にとってのプラス・マイナスの評価に偏りが見られない。原則的に後続する状態性の語のみを修飾し、「わがこと」「ひとごと」の別、比較を背景とするか否か、話者にとってのプラス評価となるかマイナス評価となるか、など文脈的な制約によるバリエーションの多い程度副詞に比して、きわめて汎用的だったといえよう。

また、第1章、第6章、第7章等でみたように、この強意副詞は、それぞれの語が、各時代で主要程度副詞全体に勝るとも劣らないほどに多く使用されていた。そして第1章、第5章でみたように、「ほんに」「まことに」のような語は、江戸・上方を問わず用いられ、地域的な汎用性も兼ね備えていた。

強意副詞は、程度副詞に比べると、中央語での語彙的バリエーションは少なく、近世から現代にかけて、話し言葉で多用されていたのは、「ほんに」とそれを受け継いだ「ほんとうに」であった。また、「改まり」の文体的特徴をもち、情意・誠意の伝達を担うようになる「まことに」、明治初期に青年知識層の男性語として用いられ、硬質な文体的特徴を持つものとして現代に至っている「じつに」という、主に文体的な選択としての語がこれに加わる程度であった。もちろん地域的変種として「ほんまに」のような語もあるが、「ほんに」「ほんとうに」などの共通的な語と現代に至るまで共存している。

つまり近世から近現代において、程度副詞に比して、意味・用法、文体や地域的状況、いずれにおいてもより汎用的・共通的であったのがこれらの強意副詞であり、その傍らで

程度副詞は状態性の語を修飾するという制約の中で、意味・用法や文体的、地域的に、各語がより個別・具体的特徴を持ち、積極的に新陳代謝がなされ、使用者のより細かな表現意図を支えていたものと考えられる。

既存の「陳述副詞」「程度副詞」「情態副詞」という副詞の 3 大別としての「程度副詞」を前提にしたとき、時に「広義程度副詞」などとして「程度副詞」の傍流に位置づけられることのある文意強調的副詞であるが、その近世から近現代における使用実態を見ると、文意・事柄内容の強調という機能から見れば、個別・具体的な程度副詞に比して、より汎用性を持つ表現であったと考えられる。